

日本の宇宙港は どこまで進んだか

スペースポート（宇宙港）は、ロケットの打上げや宇宙機の離着陸に使う地上施設をまとめた呼び名です。日本の宇宙港は**動いている部分**と**まだ工事中・検討中の部分**がはっきり分かれています。

ぼくも40年前、地上の射点から飛び立ったんだ。
港の話は、宇宙に出る前のいちばん大事な話だよ。



3拠点の到達点は、それぞれ違う

01

北海道スペースポート HOSPO

LC-0は運用中、LC-1は整備中。滑走路は1300mで運用開始

運用中＋整備中

02

スペースポート紀伊 KII

日本初の民間ロケット射場。打上げ実績はあるが軌道投入は未到達

打上げ実績あり

03

大分空港 OITA

滑走路を使う水平型として活用を検討。技術と制度の整理段階

検討段階

動いているものと、これから動かすものを分けて考えるのがコツなんだ。



02

国の目標と、いまの実数の距離

2030年代前半までに確保が必要とされた打上げ能力

30 件程度／年

目標値であり、達成済みの実績ではない

- 2024年 米国
153回の打上げが成功裏に実施
- 2024年 日本
打上げ回数は5回にとどまる

機体だけでなく、打ち上げる場所も同時に要る

宇宙港そのものを許可する制度はない

打上げ場所に係る制度

独立した制度なし

宇宙活動法上の呼び名は「打上げ施設」で、認定はロケットの型式ごと

- 米国を始めとする他国

打上げ場所の運営に独立したライセンス制度がある

- 日本

射場設備の汎用化が検討・開発段階で、単独の安全基準を定めにくい

標準がまだ無い領域は、参入の余地でもある

機体開発とは別系統の仕事がある

いまのスキル

制御・センサーの技術

プラントの保安・安全設計

設備保全・点検

段取り替えの短縮・装置データ活用

宇宙港での使われ方



帰還する機体の位置と状態を追い、指示を出す管制



周辺の人と施設に危険が及ばないようにする安全確保



帰還した機体を点検し、次に備える整備



複数機体を高頻度で捌くスマート射場の技術開発

まとめ | 分かっていることと、未定のこと

- 01 宇宙港は打上げ・離着陸のための**地上施設一式**を指す呼び名
- 02 北海道は運用中と整備中、紀伊は軌道投入未到達、大分は検討段階
- 03 国の目標は年間30件程度。**制度も職種も、いま作られている途中**

完成した施設ではなく、育つ途中の産業インフラ

動いている部分と、これからの部分。
分けて見ると宇宙港はぐっと分かりやすいよ。

